

氏名	魏 美平 (WEI MEIPING)		
学位	博士 (日本語文化学)		
学位記番号			
学位授与年月日			
審査研究科	外国語学研究科		
論文題目	可能構文の成立条件に関する研究—日中対照研究を踏まえた分析—		
論文審査委員	(主査) 大東文化大学教授	田中 寛	(博士)
	(副査) 大東文化大学教授	須田義治	(博士)
	(副査) 大東文化大学教授	福盛貴弘	(博士)
	(副査) 東洋大学教授	王 学群	(博士、外部審査)

博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

## 2. 研究の目的、論文の構成、内容

魏美平氏の博士論文「可能構文の成立条件に関する研究—日中対照研究を踏まえた分析—」は序章を含め、全8章から成り、全216頁におよぶ労作である。とくに日本語の可能表現の成立に着目し、日中対照研究の視点を援用している。ヴォイスの研究の中でも可能態は出来(出現)の形態にまず外見的特徴が観察される。日本語にも中国語にも可能表現があり、習得に関しても受動態や使役態、授受態と比較して習得上の問題はそれほど大きくないが、しばしば言語習慣の相違からいくつかの際立った誤用が分布する。「靴に本が[??入れない<入らない]」、「話に[??なれない<ならない]」といった可能表現の過剰使用もその一つの現象である。両言語の可能表現の成立条件が異なるため、「ドアを開けようとしたが、[開かない>?開けられない]」の事象に対して、中国語では「想打开、但是[打不开>??不开]」のような対応の異同が存在する。このようなズレの存在は日本語学習者にとって習得に困難が生じることから、こうした異同の生じる要因を明らかにする研究がこれまでも進められてきた。しかし、従来の可能表現の日中対照研究では成立条件を踏まえて両言語の相違点を考察した研究は必ずしも十分ではない。本論文では両言語の成立条件を取りあげ、以下の3つの問題点について、「可能」という「実現」

のあり方を表す可能表現をめぐって日中両言語の「可能」の本質に迫りながら、対照研究の視点から日中両言語における可能表現の共通性、個別性を明らかにした。考察の対象は以下の通りである。

- (1) 可能形の接辞を付加しにくい動詞はどのような場合に「可能」のニュアンスが生じやすくなるか。
- (2) 過去・現在・未来において実現可能構文の性質とは何か。意志性のない文脈で「可能・可能性」のニュアンスが弱まる要因はどこにあるか。
- (3) 日中両言語の可能表現における共通性、個別性はどのようにあらわれるのか。

本論文の序章では、研究の背景、目的と位置づけを明らかにし、本研究で用いる用語、本論文の構成を述べる。第1章「日本語と中国語の可能表現の概観」ではこれまでの膨大な研究を手際よくまとめており、本研究の明快な導入部分である。「可能」という事象の持つ多角的な現象の内包する本質を見定めるべく、日本語と中国語の事例観察を通して、その成立条件をめぐる諸問題を明らかにした。とくに再分類の試みとして「能力・属性・性能」「状況・状態・条件可能」「自発」「評価」「許可・許容」「遂行可能」といったグルーピングを行い、命題内容に対する意志性、主体性の関与を明らかにした。また、中国語の可能表現については助動詞に依る可能の意味分類、さらに補語による可能の意味分類を行い、可能補語のみならず、結果補語、趨向補語との相関についても考察を行った。第2章「日本語における可能形の接辞付加をめぐる考察」は本論文の中核的部分で、とくに接辞を付加する現象の解明に取り組んでいる。これまでの日本語の可能表現の研究に残されている課題の一つである。「テロが発生する」「桜が開花する」といった接辞付加を許さない社会現象および自然現象について日本語において可能形を付加しにくい自・他動詞と漢語サ変動詞の意味分類を行い、接辞を付加しにくい自動詞・他動詞と漢語サ変動詞の内包する諸要因を明らかにした。また、「大学に合格する>合格できる」「法案が通過する>通過できる」の成立状況との比較を通して、漢語サ変動詞の内包する可能形に注目した点が特筆される。第3章「成立条件の相互関係から可能構文への考察」も本論文の中心部分を構成する章で、渋谷勝巳(1993)、高恩淑(2010)、寺村(1982)、井島(1991)などの研究を出発点として成立条件を明らかにした。即ち接辞を付加しにくい動詞が文脈によっては「可能」の意味合いを含意する場合と含意しない場合が生じるケースを考察した。「可能」を含意する場合には「～しようとしても～」「どうしても～」のような文型や「なかなか」のような副詞を用いることで生じやすくなるなどの構文的環境を明らかにした。本章では主体と動詞の意味特徴の相互作用についても詳述している。また、日本語の格構造の制約として「私にも写せます」などの構文的性格についても明らかにした。第4章「潜在可能構文と実現可能構文の視点から見た日本語可能表現の考察」では鈴木(1965)、小矢野(1993)、高橋(2005)、林(2010)などの研究を検証しつつ、テンス・アスペクトの視点から「実現」を表す可能表現の性質を考察した。「実現」を表す可能表現である実現可能は意志性がない構文の中でも用いられ、可能表現の成立条件を考察した。とくに文脈の背後に時間的に切り離された場合について「先天的能力」「属性可能」「評価可能」「前提条件可能」「許可」といったファクターを設定した。一方切り離せない場合として「過去における事象」「現在における事象」「未来における事象」を比較しながら考察した点はこれまでにない観察手法である。一方、実現可能の構文的特徴として意志、主体の介在を明らかにした。後半部分である第5章「日本語の非可能構文と中国語との対応表現の考察」と第6章「日本語の実現可能・潜在可能構文と中国語との対応表現の考察」では、第2章から第4章の日本語の言語現象を対象に中国語との対応表現についてコーパスを用いて考察し、個々の対応関係を明らかにした。とくに本論文の批判的継承の出発点である張威(1998)、さらに張旺熹(1999)、姚艷玲(2011)らの先行研究を検証し日中両語に見られる可能の「ズレ」を明らかにした。終章では各章の確認、要約と今後の課題として、通時的な研究の必要性を喚起しつつ、可能表現のさらなる本質に向かう指向性がしめされている。同時に、本研究が日本語教育、中国語教育にも寄与する諸点を挙げている。注記は章注とし、参考文献、用例出典は総20頁に及んでいる。

### 3. 研究の結果とその意義

各章の考察を通して、上記(1)(2)(3)の3点について、以下のような研究結果にまとめられる。

(1)については、可能形の接辞付加、動詞の特徴と性質、文脈上の成立条件に関わる要素の強弱関係、意志性の有無、「可能」の解釈を持つことのできる自動詞構文の構文特徴などを中心に考察した。その結果、次の三点を明らかにした。

a) 日本語で可能形の接辞を付加しにくい動詞は主に自動詞であるが、他動詞の例も存在する。可能形を付加しにくい自動詞には、①人間の働きかけとコントロールの強弱に制限されるもの、②動詞の性質が形容詞的であるもの、という特徴がある。他動詞の場合はこれと若干異なり、①命題内容の制限、②感情・心理・態度、③授受表現の一部分、④再帰的などの現象、を表すケースがみられる。

b) 可能形を付加しにくい自動詞は、「治る」「助かる」「受かる」のように人間の動きが動詞自体に潜む場合と「降る」「咲く」「溶解する」のように人間の関与がない場合に対して、前者の人的働きがある

意味素性は「可能」の意味組成に影響を与える要素である。さらに、主体と意志性の強弱関係において「主体(意志性が強いもの) + 動詞の意味特徴(意志性が強いもの)」は「可能」の意味合いが生じやすいことが明らかになった。格構造からも自動詞可能構文と類似しているため、視点が客観的な事象に置かれた「可能の解釈をもつことのできる自動詞文」と言える。漢語サ変動詞についてはしばしば可能の含意が生じるケース(「法案が通過した>通過できた」「憲法改正が実現する>実現できる」、「近代化する」「省力化する」など)についての多くの事例をもって検証した。

c) 「可能の解釈をもつことのできる自動詞文」は「どうしても～ない」「～しようとしたが、～なかった」という複文構造、「なかなか」「よく」などの副詞が存在している文脈環境の中、あるいは原因と条件が前文にある文脈環境の中では自動詞における「可能」の意味合いが比較的生じやすくなる現象を明らかにした。

(2)については解明された点が2つと、解明されなかった点が1つあった。

a) 構文には意図・意志がない文脈もあり、出来事の結果やこの実現が結果として表れることがある。即ち、「このドラマはうまく改編できた」のように「可能」のニュアンスが薄められ、個別的な達成・評価を表す実現可能構文も頻繁に現われる。

b) 文中に意図・意志があるものに関しては文型自体の性格や副詞と共に起る特徴が存在している。この特徴が上記(1)の c) に述べた「可能」の解釈をもつことのできる自動詞構文の特徴と類似した構文環境において実現・不実現を表すことになる。この現象から「可能の解釈をもつことのできる自動詞文」が表す実現・不実現に「可能」の意味合いが含まれていることを明らかにした。

c) 実現可能は過去・現在・未来に使われる用法で「実現・達成」に重点が置いていることは解明できたものの、意志性のない「実現」を表す可能文は自発文に近いため、「実現」と「自発」の境界を見極めることが困難なことが判明した。

(3)については可能という具体的な表現を持たない場合でも、場面によっては可能を内包する日本語、また、実際に生じた事態であるにも関わらず、それを、能力または状況の可能性・不可能性を通じて表現する日本語に対して、日中両言語に相応のズレが生じることを明らかにした。

a) (1)、(2)の言語現象は中国語では実現可能構文で表されるが、日本語では実現可能構文で表現できない、あるいはその逆であることが意義付けられた。

日本語の「可能」を表す自動詞構文に対して、中国語の実現可能である可能補語「V不C」が対応する。意志性が文脈に潜んでいる自動詞文は日本語の「可能」を含意する場合に、否定文が中国語の実現可能文に対応するものが多いが、肯定文はそうではない。日本語の実現可能のタ系に対して、否定文において可能補語に翻訳される例が多い。一方、肯定文の場合には中国語の対応表現が非可能構文である結果補語で翻訳される例が多く見られることが分かった。

b) 時間軸上において、日本語の可能表現は時制に制限されない代わりに意志性に制限がみられる。中国語の場合には時制に制限があり、可能の意味があれば可能表現を用いられるが、可能の意味合いがなければ可能表現を使用しない、という明確な特徴は中国語の可能文の成立条件に強い縛りを与えている。中国語の可能表現は時制に制限されるが、「やり過ぎると故障する」「彼が見たら驚くか?」のように一定条件下での蓋然性を表す事象と感情・心理的な作用を表す事象は可能表現で表すことができる。日本語の場合には時制に制限されないが、後者の事象は可能表現で表れず、自動詞文で表現することが多い。

c) 日中両言語には同形語が多くみられるが、品詞分類により可能表現として使えるかどうかが問題となる。中国語の名詞と副詞は可能表現に使えないが、中国語の形容詞と動詞は可能表現として使用される。可能の意味を内包する場合は枠の存在がある場合で、人的な働きが背景に潜んでいる場合である。「開けようとしたが、開かない」のように一定の文型と副詞の文脈環境が存在している中で可能の意味が生じやすくなる。こうした境界が薄まった場合は、「主体」と「客体」の属性を表し、「私が日本語を話せる」「花が咲く」のように明確な可能構文と自動詞構文になり、その結果「可能の解釈をもつことのできる自動詞文」のような日本語の曖昧性が薄められる。

以上、本論文では可能構文のうち可能形の成立条件をめぐって、日中対照の視点から可能事態の生起する環境、文脈を明らかにした。従来の形態論的、構文論的な考察に加え、意味的な交渉からの視点を当てることで可能という事態の本質に迫る成果であると意義付けている。

#### 4. 審査会における意見と評価

口述試験は2016年1月26日、大東文化会館401号室で行われた。当日は執筆者からパワーポイントを使用して論文構成と内容について説明を行い、その後、副査、外部副査、主査からの質問と確認が行われた。副査の福盛貴弘教授は論文の構成と論述の流れにおいていくつかの精確性を求め、これに対して一定の理解の方向性が示された。また、データで示された語彙の選定(例えば「紅葉する」等)においてさらに意味抽出を吟味する必要性を提言した。須田義治教授は日本語学の立場からヴォイスのと

らえかたに新たな視点を見出した点を指摘した。なお、動詞の活用表などの改良についての指摘があった。主体性、意志性という規定の仕方についても今後の課題が示された。外部副査の王学群教授は可能表現と可能構文の領域において張威(1998 等)の提唱した「結果補語」の概念解釈を大きく推し進める成果であると評価した。ただ、日中対照を行う際、対訳作品を用いた場合は正確さにおいて逐一確認することの必要性を提言した。主査は総体的な立場から、執筆者のこれまでの研究の取り組みを評価し、今後の可能構文、可能表現の体系的把握に貢献する成果であることを確認した。その一方で、「彼は百メートルを10秒で走る」「彼は百メートルを10秒で走れる」を規定するより明確なファクター、認識のフレームを構築していく必要があることも指摘された。〈実現〉と〈達成〉、主体の〈意志〉の介在など更なる吟味が求められる。今後の研究の課題として、以下の諸点が想定される。ひとつは通時的な研究である。可能形の接辞が付きやすい動詞と付きにくい動詞がなぜ分かれていたのかを歴史的な変遷から分析する必要があり、それにより自動詞構文が日本語の「可能」を含意することとの関連性と経緯も分かるようになると考えられる。もう一点は形態的諸問題である。今回の研究では主に動詞の可能形の接辞が付かない自・他動詞と漢語サ変動詞を対象として、非可能構文であっても日本語の「可能」を含意することを考察したが、日本語の可能形の接辞が付かない構文は他にも多く存在している。例えば「～しにくい」「～が可能だ／不可能だ」「～得る／得ない」「～かねる」「～わけにはいかない」などの場面、意味的環境の考察である。これらの構文が日本語の「可能」を表現するときに、日本語の「可能」の性質上か検証の課題となる。〈可能〉と〈可能性〉の相関、とりわけ「悔やんでも悔やみきれない」「連絡しようにもしようがない」「泣くに泣けない」といった複文環境、および同語反復の形態で不可能の生起する現象などのさらなる考察である。こうした残された問題点をさらに進展させ、通時的研究も射程に置きながら現代日本語の可能表現との繋がりをより明確に、より深層的な考察を進めることにより日本語教育と中国語教育の実践にも生かされることが多いに期待される。

なお、本文中の図表、記述表現、また注記、参考文献については改善点が数箇所指摘されたが早期修正が可能な範囲であり、本研究の総体的な成果を損なうものではない。以上の各委員の意見整理は主査がおこない、内部副査、外部副査の確認、承認を経て、ここに上程する。

## 5. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（日本語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

(平成28年2月11日)

以上

## 添付資料

### 後期課程在籍期間における学術業績

#### (A) 学術論文論文(全て単著) \*は査読有り

発行掲載年月日	著書・学術論文・研究報告等	掲載誌名	発行所
2011年 3月15日	日中可能表現の対照研究 —実現系可能文と潜在系可能文の使用実態から—	『指向』第8号 pp. 124-131	大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻
2012年 3月15日	可能表現における日中対照研究 —実現系可能の過去形の肯定文・否定文から分析する—	『指向』第9号 pp. 149-164	大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻
2012年 3月19日	日中対照研究 —実現系可能と潜在系可能の視点からの考察—	『外国語学会誌』第41号 pp. 315-329	大東文化大学外国語学会
2013年 3月15日	可能表現における習得の一考察 —初・中級日本語教科書をめぐって—	『指向』第10号 pp. 136-147	大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻

2015年 3月31日	可能表現における日中対照研究 —自動詞・他動詞を中心に—	『語学教育研究所創設30 周年記念フォーラム』 pp. 371-382	大東文化大学語 学教育研究所
2015年12月  (発行予定)	*可能表現における日中対照研究 —漢語サ変動詞の視点から見て—	『研究会報告 連語論研 究IV』第38号	国際連語論学会
2016年3月  (発行予定)	*実現可能文・潜在可能文の視点か ら見る日本語の可能表現 —可能 文の成立条件を中心に—	『語学教育研究論叢』 第33号	大東文化大学語 学教育研究所
2016年3月  (発行予定)	*自動詞・他動詞の視点から見る日 本語の可能表現 —可能文の成立 条件を中心に—	『外国語学研究』第17号	大東文化大学大 学院外国語学研 究科
2016年3月  (発行予定)	語形から見る日本語可能表現の成 立条件—動詞と可能表現の共起に ついて—	『外国語学会誌』第45号	大東文化大学外 国語学会
2016年5月  (発行予定)	*日本語の自動詞と中国語の実現可 能文	『日中言語対照研究論 集』第18号	日中対照言語学 会

(B) 学会、シンポジウム、外部研究会での口頭発表

発表年月日	発表題目	発表場所	主催者
2012年6月7日	可能表現における両言語の「ず れ」—実現系可能の過去形肯定文 ・否定文からの分析—	第4回「東西文化の融合」 国際シンポジウム 於. 大東文化会館	大東文化大学大学院 外国語学研究科日本 言語文化学専攻
2013年10月27日	日本語実現系可能の成立条件をめぐって	第5回「東西文化の融 合」国際シンポジウム 於. 大東文化会館	大東文化大学大学院 外国語学研究科日本 言語文化学専攻
2013年6月26日	日本語教科書で可能表現の扱いに 関する—考察	日本語/日本語教育研究 会第5回研究大会ポスタ ー発表 於. 一橋大学	日本語/日本語 教育研究会
2014年5月25日	可能表現における日中対照研究 —有対自動詞・他動詞を中心に—	日中対照言語学会第31回 大会(2014年春季大会) 於. 大東文化会館	日中対照言語学 会
2014年10月26日	*可能表現の日中対照研究—漢語 サ変動詞の視点から見る—	第6回「東西文化の融 合」国際シンポジウム 於. 大東文化会館	大東文化大学大学院 外国語学研究科日本 言語文化学専攻
2015年2月21日	日本語と中国語の可能表現に関す る対照研究 —漢語サ変動詞の視 点から—	国際連語論学会第3回大 会 於. 大東文化会館	国際連語論学会
2015年11月8日	日中両言語における可能表現の対 照研究—可能文の成立条件を中心 に—	第7回「東西文化の融 合」国際シンポジウム 於. 大東文化会館	大東文化大学大学院 外国語学研究科日本 言語文化学専攻
2016年2月14日 (予定)	日中両言語の可能表現に関する— 考察—成立条件の視点から見る—	第4回国際連語論学会 於. 大東文化会館	国際連語論学会